

山室軍平『平民の福音』および、救世軍所蔵幻燈用ガラス スライドにみる近代日本における人間教育と宗教

—大衆とキリスト教との出会いを巡る一考察—

(平成 27 年 8 月 31 日提出, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

Humanistic Education and Religion on Modern Times in Japan, Focussing
“Heimin-no Hukuin” by Gunpei Yamamuro, and Original Magic Lantern Slids
of the Salvation Army of the Japan Territory
—How Christianity met the Common People’s Moral Cord?—

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科

山本 美紀

YAMAMOTO Miki

Nara-Gakuen university

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：道徳，教育，キリスト教，幻燈，音楽隊

Abstract : Gunpei Yamamuro (1872 ; M5-1940;S15) is the one of the founder of the Salvation Army in Japan. He wrote “Heimin-no Hukuin”, its meaning “COMMON PEOPLE’S GOSPEL” stood by same common people himself. There are 6 glass slides in Gunpei Yamamuro anniversary Salvation Army Japan Heritage Center used for mission to common people in modern times Japan. In this article, I would like to study them with “Heimin-no Hukuin”, and seek the Yamamuro’s strategy to tell the Gospel to common peoples.

We could see that he started the gospel to the care for new moral education. That was meaning the cross cultural point Japanese common sense sand Western Christian’s moral sense.

Keywords : Moral Education, Christianity, Magic Lantern, Music band

I. はじめに

昨年の石井十次と幻燈音楽隊についての研究と並行し、昨年来、救世軍の幻燈と幻燈音楽伝道隊についての調査を進めている。この夏にロンドンでの調査旅行に引き続き、毎年夏に一度しか行われない石井十次に関する資料公開での調査が予定されているため、その前に周辺事項の現象を整理しておきたいと考えたためである。

2015年6月6日に行った山室軍平記念救世軍資料館の調査では、風景や救世軍の外国人宣教師による集会の様子に混じって、おそらく明治の後半から大正期

に、物語として上映されたと考えられるいくつかのガラススライドが確認された。中でも目を引いたのは、依然として鮮やかな色味が残る、6枚のスライドである。主人公とおぼしき日本髪を結った女性と、キリスト教の福音を知ることによって起こる心の葛藤が、聖書の言葉とともに生き生きと描かれている。描かれた絵と聖書の言葉とによって、だいたいどのような事が語られたかは想像がつくが、そもそもどのような筋で一連のストーリーが語られたのかは、現時点では不明である。この件について、かつて救世軍日本司令官もつとめた朝野洋中将(前山室軍平記念資料館長)に質問すると、「それは『平民の福音』から来ているはず」

とのことであった。

そこで、本稿では、まず『平民の福音』について、その構成やスタイルなどを概観した後、譬え話や逸話に注目し、山室軍平が救世軍の福音を、当時の日本の一般大衆にむけどのように接続しようとしたかを考察する。本稿の考察を通し、明治期の一般大衆が持っていた既存の道德観と、キリスト教を背景とした倫理観との接点を明らかにすると共に、そこに見える山室の人間教育の視点を考える機会としたい。

II. 山室軍平(1872; M5-1940; S15) と『平民の福音』について

i. 山室軍平

山室軍平は岡山県阿哲群(現在の新見市)に生まれ、後に養家を家出。上京し、築地活版製造所に小僧として働いていた1887; M20年頃にキリスト教の路傍伝道に出会う。それを機に「福音会」を経て築地福音教会に通うようになり、1888; M21年に受洗した。その後「一般平民の救いのために」¹ 献身し、やがて徳富蘇峯(猪一郎)から新島襄のことを聞いて同志社の夏期学校に参加。そこで郷里岡山で孤児のために働く石井十次のことを聞き、岡山孤児院を訪問する(1889; M22)。当時、石井十次は岡山孤児院を始めて2年ほどであり、一方の山室は、ジョージ・ミュラーについて書かれた『信仰の生涯』を読んで感激し、「ミュラーを助ける神は、またわたくしを助ける神」²として同志社の夏期学校に参加する決心をした経緯があった。「以来、わたくしどもは互いに相知り相信じる友人として、同君が世を去られる日まで、変らない交わりを結んだ」という³。その石井十次が、山室と救世軍との出会いのきっかけとなった⁴。書物を通して救世軍を知ってから3年後、石井の要請⁵により初めて日本に上陸した救世軍宣教師ライト大佐を訪ねることになったのである。

救世軍が日本に宣教を開始したのは1895; M28年9月のことであり、男女14人の救世軍士官が派遣されて来ていた。山室が訪ねたのは10月の中旬であったが、その日にライト大佐から救世軍入りを勧められる。しかし大佐の気さくでざっくばらんな物言いを、最初山室は不快に思ったようである⁶。帰ろうとした時に別の士官からブース著『軍令及び軍律、兵士の巻』を手渡され、それを読み、さらに毎夜開かれる救世軍の集会を「見物」するうち、次第に救世軍に傾倒していくようになる⁷。

救世軍で何よりも山室が惹かれたのは『軍令及び軍律、兵士の巻』であった。彼は、そこに日頃から物足りなく思っていた、日本においてキリスト教徒として生きるための指針を見たのである。

わたくしはこれまで日本のキリスト教が、とかく空理空論に流れて、わたくしどもの日常生活をどんなに営むかというような実際問題を閑却しているのを遺憾に思い、-中略-わたくしどもがいかに神を喜ばせ、また世を救うために生きねばならないかというような、宗教方面の教訓は全然ないわけではないが、あまり多くは教えていないことをうらんでいた。ところが、『軍令及び軍律、兵士の巻』は、わたくしが平生物足りなく思っていたそれらすべての欠陥を、全部満たしてくれたのである。

(山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、113頁。)

これは、山室軍平と禁酒運動について論じた葛西の「彼〔山室〕は当時の(クリスチャンも含めた)宗教家が、貧しい都市労働者に冷たいことに敏感であった。」⁸とする指摘にも通じるものであろう。その思いは、「私は一個の労働者である」から始まる『平民の福音』(原題は『平民之福音』)自序にある、「いかにもしてこの大いなる神様の御慈愛を、ことにわが愛する平民諸君に、お知らせ申し上げたい」との言葉にも表れている⁹。さらに、日本救世軍の初期讚美歌集の書誌項目にも「岡山県平民山室軍平」とわざわざ書いているところからも、彼があくまでも当時の庶民と同じ地平に立って宣教のわざをなすことにこだわる姿勢がうかがえるのである。

さて、そのような「平民山室軍平」による『平民の福音』であるが、これは救世軍士官たちとの出会い以来の、海外宣教師やキリスト教の教えへの、山室軍平自らの持った違和感とその根底にあると言えるだろう。ライト大佐のあっさりした態度を「高慢に」思えたというのも、山室がそれまで出会ったキリスト者のコミュニティに必ずしも常に無条件で受け入れられてきたわけではないことが背景にあると考えられる。

山室は最初に築地教会に行き始めたとき、洗礼を希望してもなかなか許可が下りなかった。山室自身は後にそれを「奇妙な青年がたまたま教会にやって来て、洗礼志願をしたからといって、えたいが知れないから、教会でも急に言うところを採り上げ兼ねたのもあながち無理ではなかったであろう。その点について、わたくしはただ教会の当事者だけをとがめるつも

りはないのである。」¹⁰としているが、受洗の重要性を説きながら、志願しても入会させてくれないことに悩みの日々を過ごしたことが述べられている¹¹。

ほとんどツテもなく上京し、活版小僧としてなんとか日々を暮らす山室は、まさに都会の片隅の「労働者」であり、「平民」であった。築地教会での出来事に限らず、それまで出会った人で、山室と同じ目線に立って話をするキリスト者はどれほどいたのだろうか。

以上のようなことから、山室が『私の青年時代』に生き生きと描く、救世軍との出会いの様子はそのまま、当時の平民(一般大衆)日本人と救世軍の出会いの場面であり、彼らの間に横たわる溝とを示していると言えよう。

[救世軍は]毎夜のように集会を営んでいたから、わたくしはせつせとそれを見物に出かけた。何しろ、外国士官たちが日本に同化したつもりからとはいえ、ぶかっこうな日本服を着て、日本のげたをはいてそこらを歩き、家の中では不体な坐りかたをした上に、足が痛くなると人前もはばからず長長とそれを伸ばすなど、だらしないことおびただしく、外観はいかにも奇妙不思議なものであった
(山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、112頁。傍点筆者)

山室は救世軍外国人宣教師の大真面目にやっていたであろう野外伝道を、最初は「見物」しに行っていたのである。日本の生活に慣れない外国人宣教師たちの苦労の様子も見て取れる。そのような宣教にまつわる苦労の一端を、山室は「だらしない」と受け取った。つい7年ほど前は、身なりの貧しさから築地教会員になることも憚られた山室が、である。山室自身が7年の歳月の間に、同志社をはじめとしたクリスチャン・コミュニティの中で、どのような意識を持つようになっていったかも興味深いところではある。ただ、そうは思っても山室は「彼らの中に何物か案外尊敬に値するものがあればこそ、『キリストのために愚となって』こっけいも演ずれば、思い切った動作もできるであろう」¹²と受け取っていた。

そのような、平民の視点を持ちながら、当時のキリスト教信仰に不足を感じ、救世軍の信仰にキリスト者の具体的な生き方を見いだした山室軍平が、日本の平民に向けて著したのが『平民之福音』である。

尚、本稿で用いたのは1899(M32)年10月発行の初版ではなく、1981(S56)年7月発行の第525版を用いる。

ii. 『平民の福音』

i) 構成

『平民の福音』は、5章から成り、「第1章天の父上」「第2章人の罪とが」「第3章キリストの救い」「第4章信仰の生がい」「第5章職分の道」となっている。まず神がどのような方であり(第1章)、キリスト教の罪や咎とは何か(第2章)を解説した後で、罪咎からのキリストの救いが述べられ(第3章)、救われた人間の生き方がどのようなものであるか(第4章)が語られ、最後に職分という日常生活の具体的な内容に踏み込み、示唆を与える構成がとらえられている。観念的になりがちなキリスト教の神理解と罪、救済の概念を身近な事柄に置き換え解説することから出発し、そこから個々の人間にとっての信仰生活の具体的な営みへと入っていく過程はわかりやすく、キリスト教と信仰生活のHowTo本とも言える。「日本のキリスト教が、とかく空理空論に流れて、わたくしどもの日常生活をどんなに営むかというような実際問題を閑却しているのを遺憾」に思う、山室の問題意識が確認される部分である。

また、本書を読んでいて印象的なのは、聖書の言葉が単に書き連ねられているわけではないことである。古今東西の様々な逸話や偉人・有名人のエピソード、日本の習慣、つい最近の事件などの雑多な話題と、聖書の言葉が対等に並んでいることである。さらに、キリスト教の教えに日本の習慣が近づけられているのではなく、キリスト教の教えが当時の日本の信心をはじめとした日常生活に近寄せられて語られていることは、特筆に値する。例えば、日本の民間宗教のアニミズム的な側面については以下のような調子である。

ことわざに、「石橋をたたいて渡れ」ということがある。神信心は人間一代の一番大事なことであるゆえ、十分注意して、どういう神様を信心するのか、私共のなすべきことかと思案をこらし、その上で一心にその神様を信心せねばならぬはずである。

— 中略 —

先ごろ救世軍の兵士になった一職工の物語に、「私は小川町で生まれましたから、もとより神田明神の氏子であります

— 中略 —

神田明神というは、かの俵藤太秀郷などに平らげられた平将門の、しかも首のないからだを一緒に祭ったお宮だというのでしょうか。それでは神田明神ではなくて、からだ明神です。自分さえむほんを起こして首

をきられたような人間を信心したってどれほどのかいがあるものですか。-中略-ちっと道理を考えて見れば、どうもばからしくて、まさかこんな神仏を信心するわけにはまいりませぬ」(山室軍平『平民の福音』1981年、8頁:1章部分)

また、イエスの罪のあがないについては、「神代の昔」に遡り、素戔鳴尊すさのおのみことの贖罪の儀式に比較されている。

人間の罪とがは、どのようにして消滅することができるであろうか。

神代の昔にはその人人の罪の代償に従うて、身につける財産の幾分を、川の辺か又は初紅持ってゆき、それを机の上にならべて神様を拝み、罪とがを品物におわせて、これを水の中に押し流すような儀式があった。そのつくえをならべる数によって四つ置けば四座置、八つ置けば八座置などとなえておったが、かの素戔鳴尊のごときは親に背き、姉に逆らい、その罪が最も重いからというて、ありたけの身代をそっくり机の上にならべ、いわゆる千座置という最も念の入った儀式を行い-中略-後世といえども、あるいは罪滅ぼしのために堂宮を建立し又は貧乏人にほどこしをするなど、随分どこでもよくやったものである。-中略-

キリストが、逃げも避けもなさらぬのみか、甘んじてかかるむごたらしい最後をお遂げなされた理由は、これによって全世界の幾億万という人間の罪とがの身代わりとなる思し召しであったからである(山室軍平『平民の福音』1981年、52-53頁:3章部分)

さらに、以下の文章などは、「キリスト教を信仰するひとりの支那人」の話として紹介しているが、釈迦や孔子までもが登場しているだけでなく、話の組み立てが「善きサマリア人の譬え話」を下敷きにしていてと考えると差し支えないと考えられる。

「私は浮き世の旅路にさまようて、はからずも、つみとがと悩みとの深い井戸におちいり、苦しみもだえておった者である。-中略-『助けてくれ、助けてくれ、助けてくれ』と呼ばわっておると、丁度通り合わせたのか釈迦で上からちょっと井戸をのぞいて、『こりゃこりゃ、お前は可愛そうだがな、何分前世の因果でそういうことになったのだから、いたしかたがない。よくよくそこの道理を考え、あきらめて往生したほうがよいぞ』とかように申し残し

て立去られた。-中略-今度おいでになったのが孔子であった。同じくいどをのぞいて、『こりゃこりゃ、人間というものはな、うかうかしておると、いつでもそういうところへはまるものじゃ。お前もきつとこの後戒めて、一度はまったいどへ二度落ちるような事があってはならぬぞ』と、かように教え立ち去られた。かかる所へ駆けつけられたのが、主イエス・キリストであった。長いはしごをいどにおろし、自分から水の底まで降りてきて疲れ切った私を引き起こし、後から押すやら前にまわって引張るやら、いろいろにして到頭私を井戸から救い上げ、薬をのませ、傷を包み、行届いた介抱をなし、やがて元気の回復したところを見計らい、私のこれまでの不心得を説き示し、なお行く先先の注意を授けて、新たに幸福なる天国の旅路に上らせたまいました。」(山室軍平『平民の福音』1981年、65頁:3章部分)

聖書の譬え話を、日本人にわかりやすく伝えようとするあまり、聖書の譬え話が本来持っている重点がそれてしまっている部分もある。今回は詳述できないが、例えば「放蕩息子の譬え話」などは、その典型である。

〔放蕩息子が〕ここに初めて気がついたのは、自分が今日までの親不孝、恩知らずの罪と、またその道楽不身持のとがとであった。-中略-せめてもの罪滅ぼしに、こじきとなってなりともわが生まれ故郷に帰り、-中略-不心得な道楽むすこも死ぬる前には自分の悪いことをさとり、公開して死にますると、いうだけなりともいうて死ぬるがましであろうと(山室軍平『平民の福音』1981年、44頁:3章部分)

このように親不孝を悔いるくだりがあるが、聖書の中では「親不孝を悔いる」から帰ろうというのではなく、生活の困窮の中で「我に返る」というところ(罪の自覚)から、父(神)の深く限りない愛が示される。「放蕩息子の譬え話」については、オルチンによる「ほととぎす」という「放蕩息子の譬え話」に題材をとった本(おそらく、幻燈用の台本)があり、その中で語られている内容との比較ができれば、一人の外国人宣教師と山室がそれぞれ日本人にキリスト教の何を教え、どう伝えようとしたかさらに検討できるのではないかと考えている。

Ⅲ. ガラススライドについて

さて、2015年6月6日の救世軍山室軍平資料館で確認されたスライドの中で、日本人を登場人物として聖書と道徳的内容を扱い、物語仕立てで上映されたと考えられるスライドは、末尾に添付の6枚である。まだ確認できただけで、その経緯も、スライドがどのようなシチュエーションで上映されたかも不明である。そもそも、制作された年代についてさえ、女性の髪型から明治末から大正時代ではないか、という程度で詳細はわからない。

スライドを一見してわかる特徴としては、以下のものがあげられる。

- 1) 聖書の言葉と絵で構成されている
- 2) 4つの地平が存在している
 - ①地(この世)：主人公(日本人女性)
 - ②心の中(魂) = ハート
 - ③天(聖霊) = 鳩
 - ④天と地の間：天使
- 3) 心がハート型、その中の「罪とが」が動物、聖霊が鳩など、具象化されている

本来の順序も不明ではあるものの、ここで各スライドを提示しながら、そのものからわかることに限定して述べたい。

【スライド1】女性、天使、心(目、左上：蛇、右上：孔雀、下左から：虎・蛭(蛙?)・男性・蝸牛・豚・山羊)聖書の言葉：「人とは外の容姿を見、真の神は心を見るなり」(サムエル上16：7)

主人公と思われる女性、聖書を指し示す天使、ハート型で示される心、その中にある開いた目と動物とで構成されている。動物は、『平民の福音』で言われる「罪とが」と考えられる。ハートの上部中心に「目」が描かれているが、これが聖書の言葉にある「真の神の目」か、人間自身の「心の目」を示すかは不明。

【スライド2】女性、ドクロ、心(目、左上：蛙?をつかむサタン側天使、右上：蝸牛?を持つサタン側天使、それぞれの動物を抱くサタン側天使)、左下のハートの外に「不信仰」の文字。聖書の言葉：「われ願ふ所の善は之行はず反て願ざる所の悪は之を行へり」(ローマ7：15)

女性の背後にあるドクロと、女性とのコントラストが印象的なスライドである。ドクロがニヤニヤ笑っているように見える一方で、必死の形相の女性は剣を構え、心の中をにらみ付けている。心の目は瞑られ、心

の内壁をサタン側の天使が占めており、それぞれの天使は「スライド1」の動物を抱きかかえるなどしている。

【スライド3】女性、鳩、天使、心(目、左上から蛇・山羊・孔雀・男性・蛭・蝸牛・豚・虎)、聖書の言葉：「呪われ困苦人なる哉この死の躰より我を救はん者は誰ぞや」(ローマ7：24)

髪を振り乱した女性は、すっかり疲れ切った様子である。鳩が光を放ち開いた「目」を照らし、十字架を掲げた天使が剣を持って心の中の男性や動物に戦いを挑んでいる。

【スライド4】女性、天使、心(目、鳩、左上から山羊・孔雀・蛇・男性・蝸牛・蛙・豚・虎)聖書の言葉：「これ我らの主イエスキリストなるが故に神に感謝す」(ローマ7：25)

動物で表現されている「罪とが」が追い出され、安堵し晴れ晴れとした表情で上を向く女性。天使が聖書を示し、聖霊と思われる鳩が心の中心を占める。

【スライド5】女性、天使、心(目、鳩、聖書、十字架)、追い出された人や動物たち(左上から孔雀・山羊・男性・蝸牛・蛇・蛙・豚・虎)聖書の言葉：「全き者来る時は全からざる者廢るべし」(Iコリント13：10)

動物たちは心から撃退され、代わりに心の中には目と鳩、聖書、十字架が真ん中で縦に置かれる。

女性は微笑みを浮かべ、初めて手が描かれる。表情とともに何らかの心理的な変化、例えば積極性などが表現されているのだろう。

【スライド6】女性、天使、心(帯、はちまき、鎧兜、刀、靴、ぶどう、稲、いちじく?)、

聖書の言葉：なし(絵そのものが聖句?) おそらく、最後のスライドに相当するのではないと思われる。女性は決意した表情で合掌し、天使が彼女の背後にあって左手を掲げている。天使の左手の先が途切れており、これまでのスライドで天使が持っていた聖書や十字架を持っているのか、あるいは天をさしているのかなどは不明。

心の中央に日本の鎧甲が描かれており、帯と思われる紐、右に日本刀、洋靴が描かれている。これらは聖書エフェソ書6章13節から17節だと推定され、だとすれば、消えかかっているが左上に描かれているのは、盾なのだろうか。

また、ハッピーエンドの図であることから、このスライドが最終のスライドの可能性が高い。スライドに「八」の文字があるので、8～10枚セットだったと考えられる。

IV. 終わりに：山室軍平による救世軍の信仰と日本の民間道徳の接続

『平民の福音』は、そのタイトルからもわかるように、平民(大衆)にとにかくわかりやすくキリスト教の教えを伝えることを目的として書かれたものである。本書の中では、真の神様とは、自身の「罪とが」とは、悔い改めに導かれた救いとは、罪に勝利した信仰生活とは、それを持続させるにはどうしたらいいかについて、当時はここまで必要であったのかと思われるほど具体的にはっきりと述べられている。

例えば、山室自身が行った不思議な儀式「悪魔の葬式」などはその典型であろう。

神田小隊にて「悪魔の葬式」という特別集会を営んだ。これは私共神のてにつく兵士が夜を日に継いでの戦争中にぶんどった悪魔の国のぶんどり品をひとまとめにして弔うた式である。ぶんどり品の第一はきせるとパイプとであった。

(山室軍平『平民の福音』1981年、68頁：3章部分)

この悪魔の国のぶんどり品は、第2はカルタ、第3は義太夫本、第4は酒屋の書出し(領収書)と杯、第5は吉原の女郎からの手紙、第6はお守り札、と延々と続く。最終的にそれらは「みかん箱のあきがらにおさめて」しまい、「[悪魔のぶんどり品を葬った]自分は今前の悪魔と一緒に、従来の儀式的の信仰を葬り、今後は聖霊に導かれて新しき信仰生活を営む」と告白したエピソードが語られている。

大の大人が神妙にこれらのものを処分し、「儀式的の信仰」を葬るはずが大真面目で一連の儀式をとり行っているところなど、滑稽でさえある。この種の滑稽さやユーモアは、『平民の福音』を通して山室の筆致ににじみ出ているものでもある。このようなことから、山室が何よりも日本人平民にとってわかりやすく、身近な話題としてキリスト教を示すことを第一とした、終始一貫した姿勢がうかがえるのである。

1902:M35年に始まった救世軍幻燈音楽隊による伝道も、山室のそのような考えを引き継いでいるとするならば、ガラススライドに描かれた男性や動物は、として表現された『平民の福音』で示された「罪とが」の、具象的により進んだものであると考えられる。おそらくそれらは、当時の人々にもある程度既存のイメージとしてあったものを利用したものであろう。

さらに『平民の福音』には、「悪魔の国のぶんどり品」だけでなく、日本人のふだんの営みの中で、聖書に照らして罪となるものをはっきりと言葉で示している部分がある。

すなわち、「すべての不義は罪なり」「信仰によらぬ事は罪なり」「善を行うことを知りてこれを行わぬは罪なり」と申して、詳しく言えば、けんか口論、ばりぞう言、恨み、ねたみ、盗み、むさぼり、高慢、偽り、不孝、不義理、不人情、不身持、不養生、無慈悲、不信心などのおこないはもち論、酒を飲むことも、ばくちをうつことも、仕事を怠り、むだづかいをなし、約束を破るなどのことも、皆これよき神様の前にはゆるすべからざる罪とがである。

(山室軍平『平民の福音』1981年、23頁：1章部分)

ここには、キリスト教の「罪の認識」になじみのない日本人にとって、わかりやすい(想像しやすい)罪の実例が挙げられている。「罪とは何か」という問いは、観念的なものからひどく卑近なものまで幅広く、個別的でありながら社会的な面もあり、キリスト教か否かという以前に、実際には固定しにくいものだろう。

しかし、それ(罪の自覚)なくしては「キリスト教の救い」は成り立たず、福音は平民大衆にとって、いつまでも必要ない。山室自身の信仰的理解はともかく、『平民の福音』には、彼が「平民」として、キリストの福音が日本人のどこの部分に届くべきであると考えたのが明確に現れている。翻ってみれば、それが当時の日本人にとっての一般的で身近な問題であり、人々は何よりもそこから救われたいのであった。

本論で取りあげてきた『平民の福音』の逸話や、ガラススライドからは、山室は日本人平民が日常的に抱えるごく一般的な問題(格差や貧困、家庭不和など)の原因(飲酒、賭博、古い慣習など)を、キリスト教の教える「罪とが」に結びつけようとしていたことがわかる。もっと言うならば、キリスト教の神を中心としたところから発想される「罪とが」ではなく、まずは平民一般が認識している日常生活の不協和の要因として「罪とが」を設定し、その解消にキリスト教の信仰が効果あるものとするところから、平民への伝道をスタートさせたのである。これらは意識的であったかどうかは今の時点では言えない。しかし日本の一般平民が、聖書の物語を異国のお伽話ではなく、自分たちのためにある福音として受け入れられるためには必要

なことと山室が考え、工夫した結果であろう。

「実生活に効き目のある宗教」が一般受けすることはよくあることだが、人々の信仰の持続には成長が欠かせない。そのためか、山室は『平民之福音』に続いて1903:M36年『戦争的基督教』を著す。

本稿で確認できた『平民の福音』に見られる山室軍平の思想は、おそらく彼の作った、当時の流行歌や軍歌を使用した讃美歌にも通じると考えられる。今後は、これまで収集した資料と、英国救世軍資料館に保存されている同時代の資料との比較分析を進め、日本近代における人間教育と、音楽や幻燈などといった大衆メディアとの関わりについて、さらに研究を深めていきたいと考えている。

【参考文献】

石井十次研究会

『写真・映像で綴る岡山孤児院－石井十次と岡山孤児院の児童養護実践－』2006年。

岡山孤児院

『石井十次日誌(明治二十九年)』1967年。

『石井十次日誌(明治三十一年)』1969年。

葛西賢太

「救世軍の山室軍平と禁酒運動－自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』第10号(2008年)79-87頁。

山室軍平

『戦争的基督教』東京救世軍日本々営、1903年。

『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年。

『平民の福音』救世軍出版及供給部、1981年。

「石井十次君とわたし」『石井十次伝』石井記念協会、【420 - 444】、1987(復刻)。

山本美紀

『メソジストの音楽』ヨベル、2012年。

「岡山孤児院音楽隊を巡る音楽環境と、近代日本におけるキリスト教Band文化の萌芽をめぐって」京都大学大学院文学研究科キリスト教学専修現代キリスト教思想研究会(アジアと宗教的多元性研究会)『アジア・キリスト教・多元性』【101-125】、2015年。

＜資料提供＞

謝辞：以下の資料館より、写真資料の掲載いただきました。

社会福祉法人 石井記念友愛社 石井十次資料館

山室軍平記念救世軍資料館

＜参考資料＞

【スライド1】



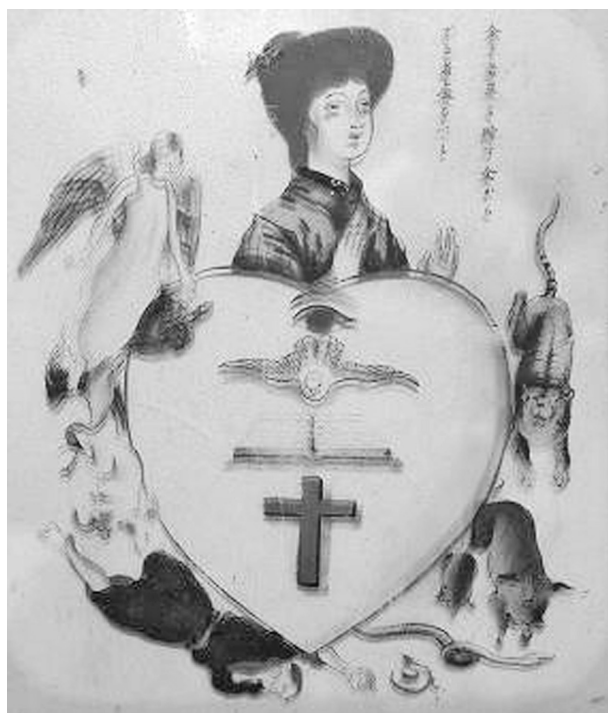
【スライド2】



【スライド3】



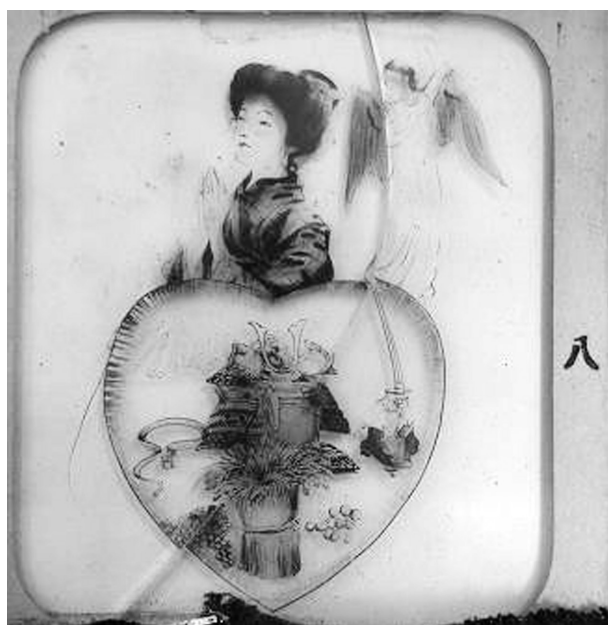
【スライド5】



【スライド4】



【スライド6】



注

- 1 山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、36頁。
- 2 同前。
- 3 同前48頁。
- 4 「〔1892；M25年〕石井十次君は痔の手術を受くために、上京して同志社病院に入院せられた。－中略－其の少し前に石井君の友人某氏〔青木要吉〕が米国から救世軍の創立者、大将ウイリアム・ブース著『最暗黒の英国及びその出路』という一書を贈り、『此は目下欧米諸国で大層評判の高い書物であるから、一部贈呈する』というて来た。そこで君は其書物を携えて入院し、同志社の学生にて英語に堪能なる山本徳尚君といふ人に頼んで、毎日之を其の枕許で訳読してもらい、私は又毎日出かけて行つて、其聞書を作ることとなった。」（同前、122-123。）
- 5 「石井君が言うには、『このごろ英国から救世軍の一隊が日本に渡来し、すでに第一回の集會を東京の青年會館で営んだ様子で、それに対する新聞雑誌の批評間まちまちである。自分は上京して救世軍を訪れたいと思い、すでにバックストン氏からその司令官宛の紹介状さえもらっているが、－中略－どうにもるすにすることができない。－中略－どうか一つその救世軍をたずね、君の分とわたしの分と二人分見て、様子を知らせてもらいたいものである』とのことで、－中略－バックストン氏が石井君を救世軍司令官ライト大佐に紹介する手紙をもらい受け、－中略－京橋区新富町に救世軍日本本營を訪問することとなったのである。」（同前、110頁。）
- 6 「司令官ライト大佐は非常に気さくな性質で、少しも小さな事に拘泥しない人であったから、その時もひとりでビスケットをかじりながら、無造作にわたくしに向かって、『君に勧める。君は救世軍に入りたまえ』などと言われる。その態度がいかにも高慢であるようにわたくしには感じられて、はなはだ不愉快に思った。」（同前、112頁。）
- 7 「わたくしは四十日ほどの間、昼は大工のまねごとをしながら、夜になると出て行って救世軍を見学した。－中略－毎夜のように集會を営んでいたから、わたくしはせっせと見物に出かけた。」（同前。）
- 8 葛西賢太「救世軍の山室軍平と禁酒運動－自助努力、社会事業、宗教的救済のはざままで」『駒澤大学心理学論集』第10号(2008年)、85頁。
- 9 この自序には「1899 (M32)年10月中旬」との記

載があり、1899 (M32)年初版以来引き継がれているものである。(山室軍平『平民の福音』救世軍出版及供給部、1981年。)

10 山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、32頁。

11 「だんだん集會に出席するうち、牧師からクリスチャンとなるには、洗礼を受けることが大切だという話を聞き、『それでは一つ、わたくしにもその洗礼をお願い申したい』と願ひ出ておいたのに、どういふものだから、教會では他の人々に洗礼を授けるついでではあつても、私には受けろと言つてくれない。そんなに洗礼が大切だと教えながら、授けてくれないものとしたらどうすべきかと、わたくしはその事についてしきりに思い惑つたのであつた。」（同前、31頁。）

12 山室軍平『私の青年時代』救世軍出版及供給部、1929年、112頁。